

モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」

四日市康博（昭和女子大学）

発表要旨

13 世紀から 14 世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権はユーラシア各地を席卷し、その支配や影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越したモンゴルの共通様式が見られる。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolica があったと言われる。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではなく、ましてや、モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impact があり、そして、それに対する各地域や各社会ごとのレスポンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけでなく、長期的な経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対するレスポンスを知る必要がある。モンゴルから二度の侵攻を受けた日本は、世界でも最も古くから「モンゴル襲来」に対する研究が進められてきた。ただし、従来の研究は日本と元という2国間関係、或いは、それに高麗を加えた3カ国関係による外交・軍事関係という視点に基づいたものであった。モンゴル帝国＝元朝の対外計略は日本のみならず、ベトナム、チャンパー、ミャンマー、ビルマ、ジャワ、琉球、サハリンなど、海域アジア全域に及び、それらは必ずしも互いに無関係ではなかった。また、海域アジア各地における「モンゴルの衝撃」の影響はその後も長期的に持続してゆくのである。

略歴

1995 年早稲田大学(第一文学部)卒業。2004 年早稲田大学文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007 年学位(博士(文学))取得。

2005/4-2008/3 九州大学人文科学研究院専任講師(任期付)。2009 年～駒澤大学文学部非常勤講師。2012 年～早稲田大学総合研究機構中央ユーラシア歴史文化研究所招聘研究員。2014 年～昭和女子大学国際文化研究所客員研究員。

専門分野はモンゴル帝国期における東西ユーラシア交流史、海域アジア交流史。

主な著作:『モノから見た海域アジア史――モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流』福岡:九州大学出版会,2008.3.